

# フークトーフ通信 65

須賀川出身の「こいでやすこ」の絵本世界

澤 導子 (福島市)

須賀川市出身の絵本作家、こいでやすこの絵本を読むとなつかしいわらべ唄が思い出されます。そして絵本に描かれている、いっしょに集う仲間のことや、福島豊かな自然の様子も思い出されます。独特のリズムにあふれた文章を読むと絵本の世界を楽しんでみたくくなります。「福島」があふれ出て来ます。今年2月に40刷の出た「おなべおなべにえたかな？」は、きつねのきつこちゃんが登場するシリーズの中の一冊です。

春の日、たんぽぽをつんで、いたちのちいと共におおばあちゃんの家を訪ねるきつこちゃん。森の動物たちのお医者さんのおおばあちゃんはスープを煮ていました。足元にはチゴユリやらスミレなど、福島の自然あふれる花が咲き、昆虫たちも歓迎してくれています。おおばあちゃんは、こがらすの治療に大急ぎで出かけるので、スープの番をきつこちゃんたちに頼みます。さあ、きつこちゃんたちは、うまくスープを作れるでしょうか： おいしいにおいにさそわ



れて、アオムシやアリ、チョウたちも集まって来ます。「おなべおなべにえたかな？」と聞くと、おなべは「…にえたかどうかたべてみよ！」と応じます。虫たちやノネズミ、小リス、モグラなどもおわんや、葉っぱの皿などをもって集まって来ます。おいしくできたスープをみんなであじみをしていたのですが、おかわりを何度もして、おなべはカラッポになってしまい、おまけにこげついてきました。さあ大変。小動物や虫たちは力を合わせて水を入れます。新しいスープにするたんぽぽやおまめも入れます。みんなでスープ作りをするページは、だれもが一所けん命です。アリやアオムシたちが出来上がりしました。そこへおおばあちゃんが帰って来て「おなべおなべにえたかな？」とおなべに聞くと、おなべは「ちようどいいにえごろ！」とうれしそうに応えます。

「なんてすてき！ はるのあじがするはるのスープ よくおなべのばんができたこと」のこぼにみんなは大満足。おなかパンパンに食べて寝ころがります。つくしんぼうたちも喜んでいます。

小さな小さな生き者たちがそれぞれに力を出し合い、おなべを中心にスープ作りに成功します。きつこちゃんのリーダーシップも發揮されて絵本を読んだ人も、福島の自然の豊かさや、生き生きしたわらべ唄が口から出て、心が踊り出し、ああ楽しかった、という満足感と満足感に浸されるのです。こいでやすこの絵本で初めて、アリやアオムシたちの活躍をたんのうしました。

こいでやすこ『おなべ おなべ にえたかな?』

(福音館書店、1997年)